

映像の言語と文法（10）

——文理工芸融合に向けたリベラルアーツのトリヴィアムと映像の弁証法・文法・レトリック——

熊 野 雅 仁
Masahito KUMANO

理工学部電子情報学科 実験講師

Senior Teaching Associate, Department of Electronics and Informatics



1 はじめに

近年、大学改革の一つとして、「リベラルアーツ教育を重視すべきだ」とする立場が見受けられる。リベラルアーツ（liberal arts）は、日本語でいうと自由学芸となるが、典型的には教養教育のことである。では、なぜ重視の対象になっているのか。

川村は次のように述べる^[1]。「リベラルアーツ教育を重視すべきだと主張する人は、人間的に成長させるとか、専門バカにならないため、といった理由を挙げることが多い。哲学などの教科を学ぶことで、そうした効果を期待している」。川村が使う「哲学」は、大学の一般教養教育で扱われた教科としての位置付けであると思われる。また、川村は次のようにも述べている^[1]。「日本の大学におけるリベラルアーツ教育は、昔は今より行われていた。しかし、最近ではどんどんと減り、以前よりも少ない時間数しか教えていない。リベラルアーツ教育重視は、昔の教育内容に戻すという意味もある」。つまり、教養教育は、一時的に減らされたが、何らかの問題が生じ、もう一度戻そうということだろうか。

我が国において、国立大学における教養学部は第二次大戦を引き起こした日本人の視野の狭さの反省から、狭い専門教育への偏りを廃し、広い知識を身

につけることを目的として設立されたものである^[2]。この第二次大戦後にかぎらず、それ以前より、まだ大学に進学できる者が少数であった時代から 20 世紀のある時期まで、アカデミックな知識を学んだ大学卒業者といえ、広い知識・高い思考能力を持つ教養人と見なされた時期がある。そして、教養人には、道徳や倫理感を備えた人格が期待される。どうやら、この前提が関係しているらしい。

このアカデミックという言葉の語源は、紀元前 387 年、古代ギリシアの哲学者 Platon がアテナイ近くの森林公園の名に由来する^[3]とされ、その森林公園で学問を講じたことから、「学問を教授する場所」を示すようになった。その名がアカデメイア（Akademeia）である。それ以後、ヨーロッパでは Platon 研究の隆盛の時期に、アカデメイアが学校として有名であったことから、これにちなんで高度な研究ないし教育機関をアカデミー（academy）と名付けることがあった。また、一部の地域（スコットランドなど）では中等学校の意味に用いられ、一般には通常の学問（liberal arts）でない特殊な分野の教育・訓練機関の名に用いられるようになった^[3]。

Platon の構想では、国家の守護者のうち、優秀な者を選んで哲学者に育てるため、基礎分野の学習をさせ、老年に達した者に国政の運営を任せることが

目論まれた。Platon は、アカデメイアで学生が勉学の一助とするための 10 巻からなる著作「国家」を執筆した^[4]。Platon の「国家」において、哲学は極めて重要な存在であるが、自由人には、哲学を学ぶ前の教養として、文芸・幾何学の学習が必要であると説かれる。ただし、この「自由」とは「奴隷でない」という意味である。

また、Platon の思想では、客観的な善の存在が探求された。Platon にとって人間のあり方と世界のあり方は同一の問であった。つまり「善」は倫理的な問題であるだけでなく、存在論的な真理に他ならず、善の認識こそが人間の幸福であるとする思想であった。つまり、非奴隷たる自由人が身につけるべき教養として、広い知識・高い思考能力、道徳・倫理感を含め、善の認識能力を兼ね備えた人材育成のため、その基礎として教養を学ばせたのである。

その後、古代ローマにおいて、技術 (ars) が、自由人の諸技術 (artes liberales) と、機械的技術 (artes mechanicae) に分けられた。この自由人の諸技術の英語表記がリベラルアーツである。ローマ時代の末期、5 世紀から 6 世紀にかけて、リベラル・アーツは、七つの科目からなる自由七科 (Seven Liberal Arts) として定義された。このときの、おもに言語にかかわる基本三科、つまりトリヴィウム (trivium) が、文法学、レトリック、弁証法である。一方、おもに数学に関わる四科、つまりクワドリヴィウム (quadrivium) が、算術学、幾何学、天文学、音楽であった。このように、この時代の教養では、文・理・芸の境界はまだ浅く、相互が連携しやすい状況にあった。

さて、このリベラルアーツがなぜ注目されているのか。近年のリベラルアーツ教育に注目する動きには、19 世紀に始まり、20 世紀に顕著となった学問の分化・専門化が関連しており、特に我が国では文理融合の動きにも繋がっている。しかし、一般教養教育の削減は、21 世紀以降の大学の教養教育に欠けていることに対する批判からきているようである^[5]。この点については後で述べる。

ただし、こうした話題は、映像に関する本連載と何の関係があるのだろうか。映像は、まだ誕生から 100 年あまりしか経っていないが、学問としての体系化はあまり進んでいない。教育機関・研究における取り扱いは、理系、文系、芸術系、それぞれ独立して扱われており、連携が行われにくい。21 世紀になって、国策のもと、日本のコンテンツ産業、教育機関の連携を試みる動きがあるが、この学問の分岐が障壁となっている。また、日本の映像業界では、制作者の倫理観が問題となっているが、映像業界では現業に忙しいため、教育に割く時間がない。一方、教育機関では映像の教養教育の体系化が未熟な状態にあり、コンテンツ制作者の育成には力を注いでいるが、まだ善の認識の育成は欠けている。

このように、映像業界においても、Platon の教養教育やリベラルアーツに学ぶべき要素があるように思える。本稿では、リベラルアーツを軸に、映像のトリヴィウム、教養教育に関する話題にふれる。

2 変革の要請につながった要因

2.1 教養と専門

19 世紀から 21 世紀にかけて、人類は学問の対象領域を拡大しながら、細分化された部門がさらに精緻化され、得られた知識は増大し、専門化とともに分岐が進み、それが繰り返された。知の体系は細分化されやすいものであり、この逆らい難い流れは人文社会系、理工系に共通して及んでいく^[2]。この動向は、知を深化、増大させた専門化の優れた面とともに、蛸壺化した狭い知識としての印象の面で語られる。また、教育機関の限られた時間的制約のある枠組みの中で、専門知識の爆発的増大が、次第に一般教養教育を追いやる圧力となるのである。

2.2 日本に特徴的な文理の分岐

日本には、知識の蛸壺化を促進した別の要因もある。18 世紀まで学問は「哲学」として包括的に捉えられるのが通例であった。本来の哲学は、文・理を超えた全体としての世界を対象とする知の営みで

ある。科学や社会科学も含め、19世紀に個別の専門分野が哲学から分離、独立した^[6]。例えば、英語の scientist という語が W. Whewell によって造語されて初めて使われたのが 1840 年と言われている。また、1820 年代に設置された有機化学の研究室が、いわゆる「ラボラトリー」制度の始まりと言われるが、このとき、まだ理学部は存在せず、哲学部（学芸学部）の中にあり、理学部が哲学部から分離・独立するのは 1870 年代であった^[6]。その同年代、日本最初の官立大学である東京大学が明治 10 年（1877 年）に設立された。これは、その後の日本の大学設立において、学問が分岐・独立する傾向の最も強い時代のヨーロッパの影響を受ける傾向にあったことを示している^[6]。そして、日本は、大正 7 年（1918）年に公布された新たな「高等学校令」により、大学進学のための予備過程として旧制高等学校に「文科」と「理科」の峻別を取り入れた^[6]。我が国は、諸外国に比べ、高等学校・大学での文・理の分岐が強く表れているのである。そして、この状況には「縦割り構造」という表現も使われる。

ちなみに、日本生まれの「科に岐れた学問」という原意をもつ単語「科学」は、science の訳語として 19 世紀後半に造語されたものであり、学問の分岐の影響を如実に表しているものと思われる^[6]。

2.3 文理融合への期待

ただし、海外で文理の連携が円滑であるということではない。日本学術会議の「提言：知の統合－社会のための科学に向けて－」（2007）では、次のように記されている。「C. P. Snow が文科系研究者と理科系研究者との間の対話の欠如を“二つの文化”と称して指摘以来（1959）^[7]、50 年が経った^[6]。Snow の指摘以来、“文”の知と“理”の知が互いに没交渉で発展してきたことを現代文明の歪みの一つとして捉えることは定説となっている^[6]」。

この流れを受けて、日本学術会議では、「新しい学術の体系－社会のための学術と文理の融合－」（2003）の中で、避けがたい文・理の分岐、学問の

細分化の問題を踏まえた上で、次のように述べている。「研究の高度化・細分化と高等教育の大衆化の狭間で、研究と教育の乖離が進展し、学部教育の場で研究と教育の一本化を古典的な形で取り戻すことは不可能になっていると言われる。しかし、教育の方法を単に専門知識の詰め込みではなく、まず現実の事象や問題に目を向けて、そこから次第に基礎的・系統的な専門の世界に下降していくという実践的なアプローチが、問題を自分で考える態度を触発する方法として、また専門知識を生きた学問として身につけるための方法として、高等教育のカリキュラム編制上考慮されるべきである^[2]」。

その後、文理融合の試みが始まったが、たいていはうまくいっていない。提言では、次のように述べられている。「文理融合への期待は、その歪みを正す新しい形の知の創造への期待である。さまざまな形の文理融合を標榜する研究教育組織が作られ、あるいはそれを実践する研究プロジェクトが策定された。しかし、実際は、“文”と“理”の研究者を一つの組織で共存させること、あるいはせいぜい共通のテーマを設定して協力させることに限られており、それを超えたより高い理念が提示し切れていないのが現状である^[6]」。

2.4 教養教育の減少

分岐・専門化は教養教育を減少させる圧力にはなかったが、必ずしもその契機になったとは言えない。例えば、戦後の新制大学での一般教育が高等学校教育の焼き直しと批判され、教養学部が廃止されつつある^[2]。また、大学の一般教育では、分岐・専門化の進んだ、極端なことを言えば、狭い範囲の知識から導かれる視点が一方通行の伝達という方法により伝えられる傾向が指摘され、思考力や人間性の育成に必ずしも貢献していないことも指摘されるようになった。かつて、知識・教養を学ぶためには、大学が唯一の学びの場であったが、特に近年では、インターネットの隆盛により、誰でも多くの知識に触れられるようになった。また、大学に進学する者が少

なかった時代から、全入時代と言われる今日、戦後、我が国の大学の社会的役割や教育の目的・内容が変わったにもかかわらず、社会にも大学にも旧制度による大学観が残存し、新しい大学観の確立が不十分であったことも厳しい議論の対象になっているとされる^[5]。

2.5 学士の品質低下

一方、近年、学士の品質という観点が問われ始めている。荻上は、以前、東京大学の蓮實総長が卒業式で用いた「学士の品質保証期間は3年、もしくは5年程度」と述べた挨拶をとりあげている^[8]。荻上によれば、この言葉の意味するところは「君たちは、今後何も勉強しなければ、この大学で身につけた力は3年～5年程度しか持たないので、これからもしっかり勉強していかなければならない」という、いましめを込めたメッセージであったとしている。そして、この言葉の引用に続いて次のように語る。「昨今は、出荷（卒業）の時点から品質が疑われるような学士が数多く出回っている状況にあります」^[8]。この学士の品質低下への反省が、近年、**学士力**という造語を生み、その定義が議論されるとともに、大学の役割が問われている^[8]。

この学士の品質低下の要因は、蛸壺化した知識に起因するだけでなく、新しい知識がすぐに古く使い物にならなくなることや、複雑化した社会・価値観、進むべき方向の混迷などによる、確実な有用知識の不明確化など、数多くの要因が考えられ、簡単には正しい分析を行うことはできない。しかし、その反省の矛先の一つが、知識の一方通行的伝授ではなく、人格育成・人間形成の観点を伴う教養教育の見直しや、専門知識を尊重しながらも、蛸壺化しすぎた知識を連携させ、俯瞰的視点で思考できる人材の育成にも力を注ぐ必要性が検討され、それがリベラルアーツ教育の注視に向けられているようである。また、大学の在学期間だけでは学びきれなくなった知識は、生涯を通じて学び続ける必要性を暗示しており、生涯教育も注目されている。

2.6 リベラルアーツは無意味？

川村は「リベラルアーツ教育を重視しても効果は小さい」と述べている^[1]。川村の観点によれば、「意外に見逃されがちだが、人間的な成長には、論理的な思考能力も欠かせない。論理的な思考能力の教育は、リベラルアーツ教育にほとんど含まれていない。人間の成長は、学習で得た知識だけでなく、さまざまな体験が欠かせない。」と述べている。また、川村は、リベラルアーツに代わる教育内容の三つのポイントとして、1. 論理的な思考能力の習得、2. 自分が考えた内容を上手に伝える能力の習得、良識ある人間としての意識を持つこと、としている^[1]。

一方、アメリカのリベラルアーツ・カレッジの団体（AAC）が1980年代に取りまとめた報告書がある^[2]。その中にある「一般教育について」では、一般教育（リベラルアーツ）の基本は、探求力、論理的思考、読み書き表現する能力であり、数学的思考、歴史的意識、価値観、芸術的素養と感性の開発が不可欠とされているという^[2]。川村の指摘するリベラルアーツに代わる教育の観点は、リベラルアーツ教育が新たに目指す観点と大差はないように思える。では、次に日本の映像コンテンツ産業と教育の関係を取り上げてみよう。

3 日本の映像コンテンツ産業

3.1 国策

21世紀になってまもなく、アニメーションを筆頭に、日本の映像コンテンツの海外評価が脚光を浴び、貿易上の有益な輸出品になり得るものとみなされた頃から、映像コンテンツ業界を将来の有望産業として期待し、国策としての産業育成支援法、人材育成法が注目され、教育機関による対応も始まっている^[9]。

2009年2月22日、日本のアニメーション作家、加藤久仁生氏の作品「つみきのいえ」がアメリカの第81回アカデミー賞・短編アニメーション賞を、そして滝田洋二郎監督の映画「おくりびと」が外国

語映画賞部門のグランプリを受賞した。こうした世界に通用する資質を持った人材は、我が国でも時折現れる。ただし、天賦の資質を持つ人材の出現に頼るばかりでは、映像コンテンツ産業の維持・発展は見込めない。コンテンツ産業への支援がコンテンツの輸出を期待するものだとすれば、これまでの日本の映像コンテンツ産業における取組方だけでなく、国際的視点に立った産業と学術の連携が必要となる。しかし、そもそも我が国の学術機関の縦割り構造が連携を阻んでいる^[10]。

3.2 日本の状況

我が国では、産業・技術・芸術・教育等を連携させる上で問題が浮き彫りとなっている。教育・人材育成の柱となる学術機関が、文科系、理科系、芸術系等、縦割り化が進み過ぎたため、コンテンツ産業と学術機関の連携による人材育成の活性化には、構造改革・再編が必要となっている。

それらを象徴する例として、コンテンツ工学を掲げる金子は、次のように述べる^[11]。「これまで、日本の映像コンテンツ制作に関する人材育成は、ごく一部の教育機関と OJT（就職してからの職業トレーニング）に限られていた。その結果、映画は映画、アニメはアニメ、ゲームはゲームというように、それぞれの分野の蛸壺的な教育が中心にならざるを得なかった。デジタル技術によって、共通化した技術やノウハウが生まれてきている現在、このような部分的な人材育成は時代遅れである」。

一方、著者が映像文法に基づいた理工分野への応用研究^[12]に携わった契機は、プロの、おもに若手制作者が、映像の癖・映像文法に無知、もしくは無視・無頓着になりつつあり、教育したいが現場では教育に時間をかける余裕がないという熟練者からの声であった。つまり、教育の不足である。

また、近年では、倫理感の欠落も問題になっている。さて、映像制作上の倫理感とは何か。ここでは、ごく一般的なタブーとして、図1に例を示す。

図1は、AとBという二つの編集された映像が

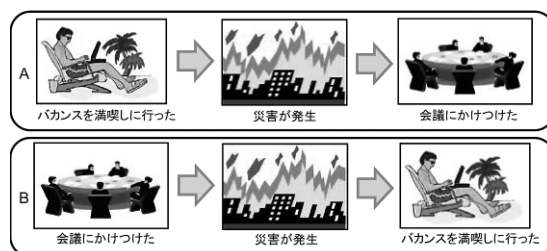


図1 映像制作の倫理感を問うタブー

示されている。いずれも、映像の素材は同じであり、A（上側）の時系列が事実であるとしよう。

Aでは、行政の役人が「バカンスを満喫」しに行ったが、災害が発生し、すぐさま災害対策会議に駆け付けた様子を伝えている。この映像によれば、この行政の役人は、当然の行為と思われる。場合によっては好感度を上げるだろう。しかし、Aの一つ目のショットと三つ目のショットを編集によって入れ替えると、何かの会議に駆け付けて仕事をしていたが、災害が発生すると、バカンスを満喫しに出かけたことになる。この行政の役人は、逆に好感度を下げるところか抗議を受けることになるだろう。ニュースや情報番組を制作する立場からすれば、このような編集は決して実施してはならないタブーであり、情報のねつ造や事実の捻じ曲げもタブーである。このようなタブーには達しなくても、表現上、前後関係としてつながりにくい場合や、映像をより良く、効果的に見せるため、ある程度の補完や脚色が加わることは多分にある。

つまり、プロの現場において、倫理感は極めて重要であるが、それが揺らいでいるのであり、その倫理教育が課題となっている。

そのような中、我が国では、テレビ（＋活字）離れが加速し、日本のメディア産業は岐路に立たされている^[13]。その理由の一部がコンテンツの魅力が失われていることである。一方、時間の過ごし方の変容として、テレビ視聴（新聞）から、ネットや携帯、ゲーム機器の使用という、興味の分散・推移があげられている^[13]。日進月歩の現代、こうした変化は短い時間で起こり得る。

3.3 黒沢明と映画芸術科学アカデミー

皮肉にも、日本映画の巨匠、黒澤明監督は、テレビが普及し始めた1950年頃、世界の映画がテレビに押され斜陽化し始めた時代、影が忍び寄り日本映画界の未来に想いを寄せている^[14]。黒澤は、世界の映画がテレビに押され斜陽化する中、それでもアメリカの映画が隆盛であり続ける理由について、アメリカの映画芸術科学アカデミー（Academy of Motion Picture Arts and Sciences）の存在を取り上げている^[14]。このアカデミーは、アカデミー賞を与える機関でもある。

アメリカでは、音声の無いサイレント映画時代から、音声の入ったトーキー映画がようやく登場した1927年頃、そのような映画の初期に、もとより映画産業・芸術・科学（技術）・教育（人材育成）の連携と発展を目指した映画芸術科学アカデミーを発足させている。そして、作品や役者・監督だけでなく、スタッフや映像・音響などのアカデミー賞の技術部門についても数多くの賞を設けており、産業全体を盛り上げ、経験を積み重ねている。黒澤は、このアメリカの取組に、強靱で安定した映像産業の未来の姿を見たものと思われる。

3.4 富野由悠季と映像原則の記録・体系化

一方、日本アニメーション業界の巨匠であり、機動戦士ガンダムの原作者である富野は、黒澤監督を含めた日本映画の巨匠たちや同時代の映画人の功罪を次のように語っている^[15]。「サイレント時代を知っている巨匠たちは、映像の癖を良く記憶していました。彼らは、前述したような理屈（映像の原則）を承知したうえで、映画を監督したものです。しかし、それらの監督たちは職人気質が強く、アカデミックになじむ性格がなかったために、映像学といったものを保持し、後継者につたえるという気風はありませんでした」。

また、富野は、我が国の映像コンテンツ界に学術的取組が起こらない日本の文化風土の問題について、次のように語っている^[15]。「彼ら（映画の巨

匠）の作品の映像的な手法を知るだけでも、映像学は豊かになるはずなのですが、その視点を周囲のスタッフや研究者が体系として記録する場をもたなかったのは、日本の文化風土が技術の表層だけを取り入れるという悪い癖があったからだと感じます。すべての技術論が“実務での勘を育てればいい”というレベルに落ちてしまえば、原則とか映像学という認識は育ちようがありません」。

3.5 学術的に継承可能な資料

つまり、我が国では、映像コンテンツ業界において学術的に継承可能な資料の作成・伝承を怠る傾向があるために、長期的な産業の維持・発展が必ずしも期待できないばかりか、むしろ、ほころび・衰退を許し、先導者の不足を招きかねない状況にあるようにも思われる。では、映像の特性を記録し、体系化の実現が目論まれる映像学において、学術的に継承可能な資料とはどのような存在が望ましいのか。少なくとも、映像コンテンツ産業の活性化のためには、映像表現に関する学術的知識の体系化が必要であり、倫理感を含め、すぐれた人格の形成に配慮した教養教育の観点も必要である。その点において、レトリックの歴史が参考になる。特に古代ギリシアから古代ローマの弁論術（雄弁術・説得術）に関連する話題を中心にレトリックにふれてみよう。

4 レトリック

4.1 古代ギリシア人と表現

逸見によれば、自分や他人の発する表現が正しいかどうかを批判的に考え、もっと理に適った表現はないかと工夫する営みには、向上心と修練が不可欠であるが、古代ギリシア人はその条件を成熟させたという^[16]。文法学の最大の祖とされるAristotelesにおいては、言語表現を明瞭にする標準語に着目し、弁論や詩作がより効果的に伝達される標準語に習うべきだと考え（連載4回2.2）、言語表現の分析のため、その後の品詞につながる「発話の部分」のカテゴリー化を行った（連載8回2.1）。また、

古代ギリシア初の文法書では、先行する詩人や散文作家が残した作品を観察することによって、あるがままの言葉遣いを引き出し、そこに何らかの規則性を見出そうとする営みとしての文法観がある（連載7回5.1）。つまり、表現の効率・優れた表現を分析・記録し、体系化する風土があったのである。

古代ローマ人はそのギリシア人の才能に嫉妬し、限りなくコンプレックスを抱き、さまざまなギリシア文化の営みを取り込んだのであった。その一環として、文法が取り込まれたが、レトリックも例外ではない。さて、この古代ギリシア人の表現に関する能力はいかにして鍛えられたのか。

4.2 最初の弁論術概説書とレトリックの萌芽

紀元前五世紀半ば、シシリー島のシラクサでは、横暴な僭主に対して民衆が反乱を起こし、民主制を樹立したばかりであったという。そして、僭主に強奪された権利や財産を取り戻すため、法律的手続き（民事訴訟）が行われたが、裁判においては議論の上手な人が得をしたという。そこに、最初の**弁論術の概説書**が著されたのである。これがレトリックの誕生であると言われる^[17]。

また、弁論術が発達した分かりやすい例がある。古代ギリシアの都市国家では、政治や法律を専門とする人間がいなかったため、市民は自ら弁論を行う必要があり、公生活において輝かしい経歴を送るには、演説の才能が必要不可欠であったという。人々は高額な謝礼を払ってまで、争うように弁論術教師の門をたたいたのだという^[17]。

この弁論術教師はソフィストと呼ばれ、弟子達に**弱い論を強い論にする能力**を与えたという。その良し悪しは別として、哲学者だけでなく、市民までもが弁論術の習得・鍛練に尽力した背景が古代ギリシアの表現への関心を高めた一要因のようである。

4.3 レトリックの負の面

Platon はソフィストを痛烈に批判したという。野内は、次のように説明する^[17]。「Platon の目には、

絶対的真理をなおざりにして目先の本当らしさを弄び、大衆の無知につけこみ、エセ議論で大衆を瞞着するソフィストたちの悪しきレトリックこそ祖国を堕落させる元凶と映ったに違いないと思っただろう」。このような観点で、レトリックは次のように言われることがある。「黒を白と言いくるめる三百代言の詭弁の術」「内容空疎な文章を飾り立てるだけの化粧の術」^[17]

4.4 イソクラテスのレトリック

古代ギリシアの Isocrates は、Platon の批判に対抗し、レトリックの地位を高めることに成功したレトリック学者である。野内によれば、**健全な判断（ドクサ）**を育てる実践的知の涵養こそが哲学の目標と説き、レトリックを単なる論争の道具と見なすソフィスト達とも一線を画し、**人格の完成**、すぐれた**教養人**となることをレトリックの目標に掲げたのだという^[17]。Isocrates がレトリックを単なる専門的技術（実学）ではなく、人間形成（人文的教養）に資するものとした思想は、高く評価され、近代、現代ヨーロッパの教養主義に脈々と受け継がれていくとされる^[17]。ただし、Isocrates は教育者として卓れていたが、弁論術を理論化＝体系化することはなかったのだという^[17]。それを成し遂げたのが Aristoteles である。

4.5 アリストテレスのレトリック

万学の祖とされる Aristoteles は、文法学の祖だけでなく、**弁論術（雄弁論）**の理論化・体系化を成し遂げた大成者でもある。Aristoteles は、弁論術を次のように定義したという。「弁論術とは、どんな問題でもそのそれぞれについて可能な説得の方法を見つけ出す能力である」^[17]。Aristoteles は、弁論術の発案者ではなかったが、成立させた弁論術における1. 説得立証法、2. 修辞（表現）法、3. 配列法が、のちに図2左の**五部門**（発想：発想論、配置：構成論、修辞：表現論、記憶：記憶論、発表：演技論）から構成される古典的レトリックとなる^[17]。

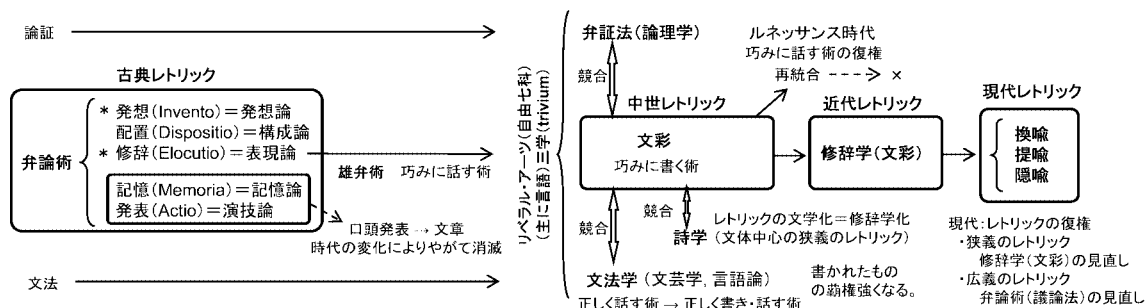


図2 レトリックの変遷

4.6 クインティリアヌスの雄弁家教育論

野内によれば、古代ローマ時代、Quintilianus の「雄弁家教育論」は、レトリック大全に他ならず、レトリックを通じての完全なる教養人の育成を構想しており、倫理と雄弁の結合の必要性を説いて、弁論家に倫理的な高潔さと広い人文主義的教養とを要求したという^[17]。

4.7 中世以降のレトリックと競合関係

その後の中世のレトリックは、神学（論理学）のしもべとして、論証・解釈の道具となり、論証は発想、解釈は文彩を中心とする修辞に焦点があてられたという^[17]。そして、雄弁術としてのレトリックは、真理の探究を行う際の論証の観点で、弁証術（論理学）と競合し、文芸学や言語論を含む文法学とも競合し、詩学の追撃も受け、微妙で複雑な力関係の中で狭い範囲に押し込められる運命にあった^[17]。ただし、レトリックと文法学は、レトリックが「巧みに話す技術」、文法学が「正しく話す技術」という役割分担はあったという^[17]。

やがて、レトリックは、Aristoteles や Quintilianus の位置付けを取り戻そうとする復権の試みが行われるが、近代にかけて文彩（修辞）に収れんし、20世紀には、堤喩・換喩・隠喩を扱う意味での修辞学となる。ただし、21世紀を前後して、再度、古来のレトリックの位置付けに新たな観点を導入し、現代的な復権が試みられている^[17]。このレトリックは辞書で調べれば、修辞学の名が現れる。しかし、

歴史的には修辞学はレトリックの一部であったため、本稿では、修辞学という語を使わず、レトリックを用いている。

4.8 雄弁家教育論でのレトリックと文法

少し話を戻すが、Quintilianus の「雄弁家教育論」は、連載7回5.2で、文法の観点から取り上げることがある。近世（15、16世紀）から18世紀末までの規範文法は、受動的なインプット型の文法観である聞く・読む能力よりも能動的な書き話す能力がより高級な知的作業と見なされ、文法をart（技）とし（連載1回2.1）、「文法とは、正しく書き、話す技術である」とするアウトプット型の文法観が重視された時代を紹介した。その源流が、この「雄弁家教育論」に記述されているという内容であった。この点で、「雄弁家教育論」は4.6で示した野内が言うようなレトリック大全なのか、それとも文法書なのかという疑問が湧いてくる。

宮脇は、「雄弁家教育論」を文法書とは呼んでいない。この文献の一部に、文法学的記述が記されているということである。宮脇によれば、Quintilianus は、この文献の中で、文法教師の職業が二つの部門から成ることが記載されているという^[18]。それは、1. 正しく話し、書く技術、2. 詩人その他の作家の正しい読みと解釈、という二つの部門である。ちなみに、この点で、Quintilianus の文法に関する記述は、アウトプット重視の文法観の源流にはなっているかもしれないが、インプット・アウトプット

の両方を重視している^[18]。

一方、この「雄弁家教育論」の文法に関する記述には、古代ギリシア文法学の文学・文献学的要素が残っている。正しく書くことが話す技術と関連し、正しく読むことは正しいテキストを決定する本文批評の役割、また、正しい解釈は読むべき作家の一群と、そうでない作家の一群を区別するための正典の編纂の役割があるという。この他にも、抜粋すると、読むべきものの優れた**道德性**、**子供の人格の育成**、**語彙の豊かさ**、**品詞**、**詩脚**、**比喩表現の理解**、**内容理解のための過去の出来事や逸話の知識の必要性**などが述べられているという^[18]。

これまでの流れから、レトリックは、巧みに話す・書くというアウトプットの観点が典型的であるが、レトリック的表現を分析するインプットの観点も存在する。雄弁家教育論には、弁論術を基軸にしているのであるから、アウトプットの観点が含まれるのは当然であるが、上記の文法的記述には、インプットの面が含まれている。

ただしこのインプットの面をレトリックのインプットの面と考えるには少し違和感がある。レトリックには表現の巧みさ、標準的・自然な表現からの逸脱等の暗示的意味がつきまとうが、正しい表現・標準的な表現という観点は文法的観点のように思える。つまり、雄弁家教育論は、レトリックと文法学の両方の観点が含まれた著書といえまいか。ただし、レトリックと文法が競合するというよりも、相互を連携させ、人格形成を含めた教養の観点とも連携しながら、雄弁家（表現者）を育成するために編著された教育書であるといえよう。本稿では、正しい・標準・典型的な表現に関しては文法、その文法的表現から逸脱した巧みな、斬新な、より効果的な表現に関してレトリックをあてる。

4.9 ヤコブソンとレトリックの復権

レトリックにおいて、時間をかけて収集・分類した表現の型、議論の型は、人間の言語と思考の基本的パターンを反映したものであり、表現や議論は発

明であるよりも、発見であった。その思いが、議論法ではトポス（論型）の分類学に、修辞法では文彩の分類学に駆り立てることになったのだという^[17]。

ただし、伝統的レトリックの側には落ち度があり、無用な分類に姪し、実用を無視した机上の空論と化した^[17]。そして、文法学と同様、その表現法に従わなければならないものという、表現上、窮屈な強要を強いるようになったことも嫌われた原因の一つである。野内によれば、古来、レトリックほど評判の芳しくない学芸は珍しく、二千年も生きながらえたのが不思議であるという^[17]。そのレトリックは、20世紀に至るまでには息絶え絶えに生きながらえていた。

そのレトリックが再生のきざしを見せたのは、特に R. O. Jakobson の論文“言語の二つの面と失語症のタイプ”（1956）が契機であったという。この記念碑的論文では、人間の言語活動における**隠喩**（選択軸）と**換喩**（結合軸）を取り上げ、レトリックと人間の認識活動の**通低性**を明らかにしたという^[17]。

連載6回1や連載8回6で述べたように、1970年代や1980年代に萌芽を見る認知言語学によって、それまで言語学としては周縁的に扱われてきた隠喩や換喩は、認識論的に意味生成の中心的役割を担う存在として探究が始まっている。Jakobsonも、その動向に貢献していると思われるが、Jakobsonは、文彩を装飾的技法と捉えるのではなく、人間の認識活動に根ざす本質的な思考パターンと位置づけた^[17]。ある時期から、レトリックは当初の**発見的＝創造的性格**を失い、文彩の収集と分類に堕ちる傾向にあったが、本来、文彩とは、日常的な平凡な表現を突き破る**斬新な表現の追及**の面を持っていた^[17]。これが第一のレトリック復権として探究が始まっている。

連載2回3.9で述べたように、Jakobsonは、芸術や映画に関しても言及している。Jakobsonは、すべての芸術が隠喩と換喩の二重構造を持ち、どちらに重点を置くかによって、作品の傾向が異なってくると主張した。そして、映像のショットの前後を

入れ替えると全体のリズムが狂うアメリカ D. W. Griffith を代表とする映画を換喩型、概念の変化に応じてショットの入れ替えが可能な C. S. Chaplin やソヴィエト・モンタージュ理論の映画が隠喩型に属するとした。映画もレトリックで語られ始めたのである。

4.10 バルトと大衆向けのレトリック

レトリックの復権では、隠喩や換喩、文彩の認知的問い直しが始まっているが、説得術としてのレトリックの問い直しも始まっている。説得術の観点では、Aristoteles のレトリックに立ち戻る必要がある。Aristoteles のレトリックとは、1. 説得立証法、2. 修辞（表現）法、3. 配列法で構成され、「弁論術とは、どんな問題でもそのそれぞれについて可能な説得の方法を見つけ出す能力である」と位置づけられたレトリックであると紹介した。ただし、Aristoteles の説得術には、万人に受け入れられる論証により、真理を明らかにする弁証法的観点が含まれている。この弁証法の観点は、Aristoteles の意図に反して古典レトリックの弁論術には加わらなかった。

この連載でたびたび登場し、「映像のレトリック」(1964)を著した R. Barthes は、Aristoteles のレトリックのうち、専門家を対象とする学問的な論証による説得術の面は弁証術が扱い、レトリックは、大衆を対象とすると規定した。そして、Aristoteles の大衆向けのレトリックの面について、次のようなことが語られているという^[17]。「あらゆる（歴史的）差異を考慮すれば、マス・カルチャーと称せられるわれわれの文化にうまく適合するだろう。そこでは、Aristoteles 的な“本当らしさ”，言い換えれば“大衆が可能だと信じること”が支配しているのだ。なんと多くの映画や新聞小説、商業的ルポルタージュが Aristoteles 的規則をモットーとしていることか。“本当らしくない可能なことよりは不可能な本当らしさを”」。

Barthes は「文学作品にまで拡張すれば、作品の美学よりも大衆の美学を予想させるレトリック」と

いう表現も用いているが、マスメディアを通じて一般大衆が受け入れる表現には、真理ではなく、大衆が喜び、大衆の美学に基づく表現に関して分析・分類・体系化する観点が存在することを示している。そのようなレトリックは小説や映画・ドラマ等のフィクションに内在している。そのフィクションのレトリックについては、Chatman も言及している^[20]が、文法でも弁証法でもないレトリックとして、ひとつの領分を占める問い直しの対象となっている。

ただし、マスメディアの報道やドキュメンタリーにおいて、大衆好みの表現を意識しすぎれば、事実の捻じ曲げに結びつく危険な面があり、それら倫理的良し悪しの体系化も望まれる。一方、事実の説得的論証は、むしろ弁証術の知識を参考にすべきかもしれない。このような観点から、映像においても、弁証術やレトリック、そして文法の観点で教養教育を意識した学術的体系化の糸口が見えてくる。

5 映像のトリヴィアム

5.1 映像のトリヴィアム

トリヴィアム (trivium) とは、ローマ時代の末期、5 世紀から 6 世紀にかけて、自由七科 (Seven Liberal Arts) として定義されたリベラルアーツのうち、おもに言語にかかわる基本三科、つまり文法学、レトリック、弁証法 (論理学) であった。これら三学は、お互いに共通項を持ち、相互が連携もすれば、領分を争う関係にもあることがこれまでの話題により、ある程度見えてきたのではないだろうか。

トリヴィアムとして位置づけられた、真理を弁証により証明する「弁証法 (論理学)」、言葉の伝達の効率性、標準、正しい表現を扱う文法学、標準からの逸脱として斬新で効果的で、創造性のある表現、文彩を扱うレトリックは、映像学を考える上でも良い参考になるものと考えている。この観点から、映像のトリヴィアムという枠組みを考えている。

図 3 左は、これまでの三学の関係を表しているが、図 3 右は、筆者が捉える映像のトリヴィアムで

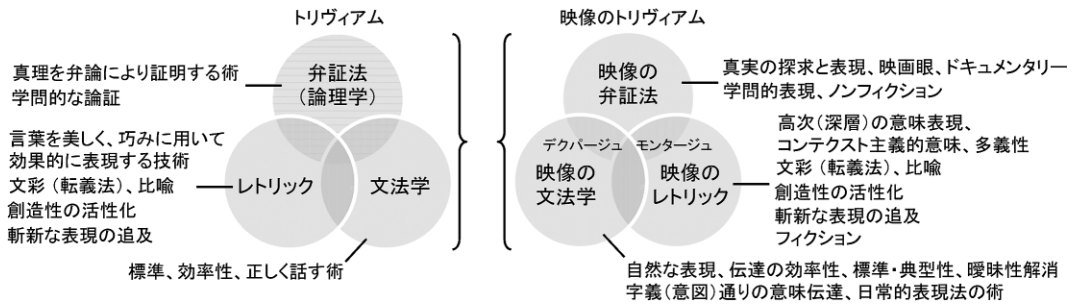


図3 トリヴィアムと映像のトリヴィアム

あり、映像の弁証法、映像の文法学、映像のレトリックは、共通項を持ちながらも、それぞれにおもな役割が考えられる。

5.2 映像の文法

筆者はテレビ放送における映像文法から探究を始めたが、報道・ニュース番組等では、万人が理解し、受け入れることを重視し、制作者の意図が誤解されて伝達されることを嫌う。特に報道で、不要な多義性・曖昧性・過度な演出は避けなければならない。そして、制作者どうしの表現上の約束事を共有するうえで、映像文法がある。

ただし、おもに中世で加わった「正しい」という観点を映像の文法に必ずしも加える必要はないと感じている。大事なことは、まず先人が見出した映像の特性・癖や表現技法・知恵を学ぶことにあり、そのための理論化・体系化であり、映像文法は、おもに大衆が受け入れる日常的表現・典型・自然な表現を焦点にあてれば良いと感じている。また、海外への輸出を考慮した映像コンテンツ制作では、日常的表現にも海外文化の考慮が必要となり、国際的な文化を配慮した外延的知識が必要になる。

5.3 映像のレトリック

映像文法と表現の観点を共有する映像のレトリックは、日常的表現からの逸脱が主軸にあると思われる。中世のトリヴィアムと同様、役割分担は可能である。つまり、映画の芸術的な表現の観点は、日常的・平凡な表現を突き破る斬新な創造的表現の認識

論的探究の観点において、映像のレトリックが典型的に取り扱う領域となるだろう。ただし、教養の立場に立てば、プラトン以来、レトリックは白を黒に言いくるめる三百代言の詭弁の術、内容空疎な文章を飾り立てるだけの化粧の術と非難された負の面がある。特に逸脱・演出・高次の意味表現に、倫理感を前提とした教養、人格が必要となるのである。

5.4 映像の弁証法

真理を論証する弁証法では、真理の捻じ曲げが許されない。同様に、真実を顕在化するドキュメンタリーなど、ノンフィクション映像では真実の捻じ曲げが許されない。この観点において、ドキュメンタリーを含めたノンフィクションについて、映像の弁証法という言葉をあてはめた。真実を見極め、その表現法により、真実を証明する方法論が映像の弁証法である。ニュースなどの事実を伝える映像では、余計な多義性や曖昧性は避けるべきであり、その点で、映像の弁証法と文法は共通項を持つ。一方、多義性や曖昧な表現は映像レトリックのテクニックである。このような考察は、トリヴィアムの枠組みで思慮を深めやすいのではないかと考えている。

6 おわりに

佐藤は、レトリックの独自の探究を進め、著作「動く映像の記号論のためにー映像のレトリックへー」（1979）において、次のように語っている^[21]。「言語表現には、じつは三種の秩序が働いていると言うことができる。第一は、線条的な累積性、第二

は、文法的な構成、そして第三が、暗黙の誘導性としてのレトリックだ。それに反して、動く映像の世界には二種の秩序しか働いていない。第一は線条的な累積性、第二はレトリックである。多くの人々が”映像の文法”，”映像の言語”というものについて語ってきた。なかには、それが比喩的な言い方でしかないことにいっこうに気づかず、本気で”映像文法が存在すると信じ込んでいるのどかな理論家たちもいた。”そして、佐藤は、映像と文法・レトリックの関係を次のように語る^[21]。「映像表現の世界とは、文法なしのレトリックの領域なのだ。あるいは、そこではレトリックが文法の役わりをはたしているのだと言ってもいい。」

佐藤の述べるように、映像表現に文法はなく、すべてレトリックの領域として学術的に扱う方法も考えられる。しかし、映像の文法は、格システム（連載9回）との関係や、自然な、標準的・典型的表現、効率的伝達、字義通りの表現の特性を中心に、十分、教養教育的扱いが可能であると考えている。

このように、トリヴィアムという観点は、映像コンテンツ制作の教養として、それなりに役に立つ枠組みであると思える。ただし、本稿で取り上げた映像のトリヴィアムは、工学的応用を目論む立場から、人間を相手にするだけでなく、計算機で扱えるような理論化・体系化法を見出す必要がある。

科学的説明・記述法の探究は、おもに数学に関わる四科、算術学、幾何学、天文学、音楽、つまりクワドリヴィアムとの関係を考えてみることも面白いかもしれない。また、算術学には、今日の経済・経営学にも相当する内容が含まれる。このように、三学と四学を含めた自由七科としてのリベラルアーツは、文理芸融合が行われていたと見なすことも可能であり、20世紀に発展した工学の技術面を加え、映像コンテンツ産業の教養教育を考える上で、文理芸融合領域の参考にするべきモデルではないかと考えている。

参考文献

- [1] 川村渥真, “リベラルアーツ教育の限界”, 知識の泉
http://www.st.rim.or.jp/~k-kazuma/ED/ED115.html
- [2] 新しい学術体系委員会, 新しい学術の体系—社会のための学術と文理の融合—, 日本学術会議 (2003)
- [3] http://www.eaj.or.jp/eajnews/news61/news61-1-j.html
- [4] http://ja.wikipedia.org/wiki/国家 (書名)
- [5] 寛田知義, 尾崎ムゲン, 若原道昭, (監修), 教育の原理と課題, 京都造形芸術大学通信教育部 (1999)
- [6] 科学者コミュニティと知の統合委員会, 提言: 知の統合—社会のための科学に向けて—, 日本学術会議 (2007)
- [7] C. P. Snow, The two cultures and the scientific revolution, Cambridge (1959) (邦訳: 二つの文化と科学革命, 翻訳: 松井巻之助, みすず書房 (1984))
- [8] 荻上紘一, “「学士過程教育構築」と私学現場からの課題: 中教審委員の立場から”, 関西私大助成シンポジウム 2008 報告, 私大政策研究, 京都公助推進会議京滋私大教連, Vol. 29 (2009)
- [9] 熊野雅仁, 解説: 映像の言語と文法 (1)—デジタルコンテンツ時代の人材育成—, 龍谷理工ジャーナル, No. 48, 第17巻2号, pp. 9-13 (2005)
- [10] 熊野雅仁: “映像メディアリテラシーを視野に入れた映像文法—文理工芸融合領域に向けて—”, 映像情報メディア学会, コンシューマエレクトロニクス研究会, 技術報告, Vol. 32, No. 47, pp. 5-8, CE 2008-70 (2008-10)
- [11] 金子満, 映像コンテンツの作り方—コンテンツ工学の基礎—, ポーンデジタル (2007)
- [12] M. Kumano, Y. Ariki, K. Shunto and K. Tsukada: “Video Editing Support System Based on Video Content Analysis”, Proc. of Asian Conference on Computer Vision (ACCV'02), pp. 628-633 (2002)
- [13] 週刊ダイヤモンド, 新聞・テレビ複合不況—崖っ縁に立つマスメディアの王者, 週刊ダイヤモンド. p. 44. 2008/12/6 号
- [14] 黒澤明, 蝦蟇の油—自伝のようなもの—, 岩波書店, pp. 312-314 (1990)
- [15] 富野由悠季, 映像の原則, キネマ旬報社 (2002)
- [16] 逸身喜一郎, “規範としてのラテン語文法”, 月刊言語, Vol. 31, No. 4, pp. 66-71 (2002)
- [17] 野内良三, レトリック入門—修辭と論証—, 世界思想社 (2002)
- [18] 宮脇正孝, “クインティリアヌスの文法概念” ASTERISK, Vol. X, No. 3, pp. 175-180 (2001)
- [19] Roland barthes, Rhetorique de l'image, Communica-

- tions, no. 4, novembre (1964) (邦訳：ロラン・バルト，蓮實重彦＋杉本紀子，映像の修辞学，筑摩書房 (2005))
- [20] Seymour Chatman, *Coming to Term*, Cornell University Press (1990) (邦訳：シーモア・チャットマン，田中秀人，小説と映画の修辞学，水声社 (1998))
- [21] 佐藤信夫，“動く映像の記号論のためにー映像のレトリックへー”，日本放送協会放送文化研究所，放送学研究，pp. 7-26, (1979)